

女性人材の育成に関する現状と課題

◇ はじめに

21世紀以降の多様性を価値とする社会において、人材の育成は、単に男子のみにかかわる案件ではあり得ない。女性人材の育成も、外国人のそれと同様に今後の重要な課題となる。女性の教育・研究・社会活動にかかわる諸種の支援と対策は、労働力の補完者としての女性の活用という域を越えて、多様性を価値とする社会の在り方に対する一つの提言となり得るからである。ここでは、これまでに提出されている諸種の資料に基づいて若干の問題提起を行いたい。

1) 女子教育の現状

・大学進学率の男女比

女子の高校進学率は男子のそれを上回るが、大学進学率は32.7%（短大を含めれば、48.5）で、男子の46.9%に及ばない。しかし、昭和23年には男女比が6:1、同50年には、3:1であったと比較すれば、著しい上昇を示している。（添付参考資料①）

・女性の大学院進学率

大学院の女性比率は、平成13年に、国公私合わせて修士34.3%、博士27.9%で、学部生の約1/3が修士課程以上に進学している。（資料②）

ただし、アメリカの女性進学率と比すと、1996年で修士55.9%、博士39.9%で、わが国を凌駕している。（資料④）

・専門分野別の女性比率

学部の場合、女子学生の比率が高いのは、看護・保健系、生活・総合科学系、人文系、薬学系、であり、低いのは、商船系、工学系、理学系である。

しかし、昭和50年と比較すると、法学・政治学・経済・商学等の社会科学系や、理学・工学等の割合が増加しつつある。（資料⑥⑦）

・職業と直結した専門志向

女子の場合、大学進学に際して、「将来つきたい仕事を考えて選択した」と答え、実際に直接関係する仕事に就いている者の割合が44.6%に上って、男子の38.1%を上回る。この数値からみて、女性の場合、進路選択に際して将来の職業との関連を重視する者が多く、しかも、初志を貫徹して専門職に就こうとする傾向が強いと考えられる。（資料⑨）

・博士号取得者の就職状況

博士学位取得者については、1例に過ぎないが、3年以内に常勤職を得た者の割合が53%であった。就職先は、大学・研究所が主であるが、特に自然科学系は研究所採用が多い。（資料⑩）

2) 現状から見いだされる課題

・進路選択に当たってのエンカレッジメント

女性の進路が、かつてのように人文科学分野に片寄る傾向は徐々に修正され、社会科学や理工系・農学系への進学者も微増傾向を示してはいる。しかし、女性の進路選択に際して、将来の職場との直結性が男性以上に重視されている。かつての教員養成系への志向がその典型例であるが、医師・獣医・管理栄養士等の資格取得可能な分野が人気専攻分野となっているのも、将来の職場に対する不安・